

「主イエスの洗礼」

2014年07月02日

マルコによる福音書 1章9節～11節。「そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。すると、『あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う』」という声が、天から聞こえた。」

主イエスは洗礼者ヨハネから洗礼を受けた。ヨハネが授ける洗礼はユダヤ全土を揺り動かす大宗教運動になっていた。主イエスは、ヨハネの洗礼運動を認め、自らも洗礼を受けたと伝えている。洗礼は罪を悔い改め、赦しに与り、生まれ変わるためのものである。主イエスは罪を認め、新生を願っての受洗であったのか。

ヘブライ人への手紙 4章15節に「この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである」と、主イエスは罪を犯されなかったとある。ヘブライ書に従えば、主イエスの洗礼は必要のないものとなる。ただ、罪ある人間と連帯してくださったというメッセージとして受け止められる。ヘブライ書の聖句は、著者がナザレのイエスは全人類の罪を贖う大祭司キリストと信じた信仰告白である。「宣教のキリスト」が告知されている。

マタイ、マルコ、ルカの三つの共観福音書から「史的イエス」（肉体を持って生きたナザレのイエス）の研究は進んでいる。モーセの律法を基礎にして、神の名によって差別管理した宗教社会に対し、鮮やかな人間回復をもたらした史的イエスは闊達な愛と自由をもって振る舞っている。頑迷なイスラエル社会体制の中で、生き生きと輝くイエス像を感動的に提示している。この「史的イエス」の研究者たちは、30歳になって神の国の宣教に立ったイエスは、当然罪を犯していたという。また、十字架の死に至るまで「神の子」の自覚はなかったともいう。確かに、故郷ナザレでは、子ども同士の喧嘩もあっただろう、恋に涙したこともあったかしのれない。母マリアは結婚前に、イエスを生んだのだから悪口も言われたに違いない。罪を知って、ヨハネの洗礼を受けたと理解することはできる。

ところが、水から上がると、天が裂け、霊が鳩のように降り「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が天から聞こえたと続いている。この記述は、マルコ福音書の著者の「宣教のキリスト」を述べたものであろう。福音書は「史的イエス」の実像を描いたものでないことは確かで、人々に救いを与える「宣教のキリスト」を知らせようとした信仰告白の書である。私たちは福音書の著者たちの信仰告白を読んでいる。

主イエスの洗礼は、罪を悔い改め、赦しを得たという「史的イエス」を見ることができるが、同時に、天から「わたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声があったと「宣教のキリスト」も伝えている。「史的イエス」と「宣教のキリスト」はどのような関係にあるのか。私には解答はなく、揺れ動いている。福音書の著者たちは「史的イエス」に、私たち以上に感動し、信仰を込めて「宣教のキリスト」として宣べ伝えた。彼らの宣教に同じ信仰をもって承認することができるのではないか。神に立てられた主イエスの十字架の死と復活の命から、即ち、歴史を超えた永遠の相から、神に根拠を持つ「私」として生きる場が保障されると信じるからである。